

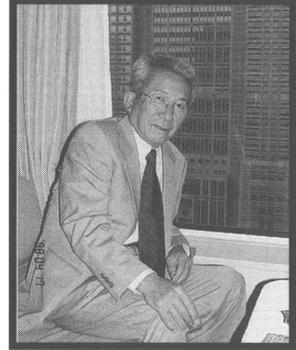
## 関口理郎先生を偲ぶ

先の天気7月号に報じられましたように、前期の学会常任理事であった関口理郎先生が、6月10日、76歳の誕生日を目前にしてお亡くなりになった。先生は50年にも及ぶ年月を主に気象庁、日本気象協会、日本気象学会において活躍してこられた。その間、先生の情味豊かな人柄に接せられた人も多いと思われる。そういう方々と共に、先生との永訣を惜む。

斯界で為された先生の業績については、日本気象協会から「岡田賞(平成2年)」を、また同年には国際オゾン委員会からオゾン観測に関する功績で表彰をさらに、日本気象学会から「藤原賞(平成9年)」を受賞されているので、その時の記事を振り返って頂ければ十分お分かりになるかと思うが、ここに重ねて先生の業績の一面に触れさせて頂くならば、データとして不足していた極東域のオゾン観測の基盤を構築して、日本のオゾン研究の存在を世界のオゾン研究の舞台に乗せられた功績を指摘したい。この延長上の一つに南極オゾンホール認識が生まれたのであり、まさに先生はその土壌を耕された。

先生は、東京大学を卒業後、昭和28年に中央気象台測候課に就職し、それ以後、気象庁予報部、札幌管区予報技術部長、本庁企画課長、福岡管区台長、本庁海洋気象部長、観測部長、そして気象研究所所長などを歴任し、定年を迎えられた。その後は、日本気象協会の重役として、また成蹊大学講師などお務めになり、ご多忙な日々を過ごされた。その一方で、我が学会の常任理事の仕事もお引き受けになり、中でも、天気誌の編集委員として細部における気配りや問題のある投稿原稿に対する適切な助言などは、先生ならではのものであった。天気5月号の編集後記に、理事を去るに当たっての感想を述べておられ、もう少し早く辞して若手にまかせるべきであった、と省みられておられる。理事としてまだまだ活躍して頂くよう、先生にいつまでもご無理をお願いしてきた者の一人として、不肖の弟子と言うべきか。

学会に於いては、先生は、編集委員を始めとする多くの作業委員会で、裏方ともいえる仕事に献身してこ



られた。その一方で、学会の国際交流基金の募金が始まったとき、公募当初は勿論のこと、その後も他人目につかず寄付を継続しておられた。学会活動への思いの深さの一つの表れにちがいない。

1年前の療養中に先生は、「成層圏オゾンが生物をまもる」(成山堂)という一般向けの解説本を上梓された。たまたま私はその本を昨年「天気」8月号で紹介している。今となれば、これが先生の遺作ということになってしまった。しかし、素晴らしい贈り物を我われに残して頂いたことを感謝したい。そして、オゾンや地球環境に関心ある人には是非とも読んで頂きたいと思う。

関口先生は、気象庁高層課で調査官を務めておられた頃、東京大学の気象研究室助教授を数年間併任しておられた。私事で恐縮ながら、その時期に私は大学院生として、オゾン全量解析に関する修士論文の指導を受けた。これが縁で、関口先生の唯一の学生になり、爾来30数年途切れる事なくご指導とご好意を頂戴してこれた。これは真に幸運であった。

先生の人柄について、私の限られた認識であれこれ申し上げるのは分を超えている。しかし、よく先生に叱られた者として心に残っているのは厳しい議論のあとお誘いを受けて飲んだビールの爽やかさについてだろうか。

合掌

木田秀次(常任理事) 京都大学地球物理学教室